

「しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい」（39節）主イエスが十字架での死を前にしてゲッセマネで口にされた祈りです。私たちも「主の祈り」を唱えるたびに、「みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ」と同じ言葉で祈っています。本当なら、自分の願いが実現するようにとしか祈ることができないのが私たちです。しかし主イエスは、私たちもまた「みこころのままに」と祈ることができるようにして下さいました。

主イエスと弟子たちにとって、出エジプトを記念する「過越の食卓」が最後の晩餐になりました。その晩餐を終えて、主の一行はゲッセマネの園に来ました。弟子たちは恐れと不安を抱えたまま何時間も過ごし、疲れ果てていました。

このとき、主イエスはいつものように父なる神と親しくお交わりになりました。弟子たちの、また私たちの恐れと不安、罪の誘惑に陥る弱さを執り成して、十字架上で息を引き取られるまで祈り続けて下さいました。その一方、弟子たちは目を覚ましていることができませんでした。主イエスがもたえるように祈っておられた時にも、彼らは眠りこけていました。

主イエスは、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」ともおっしゃっています。十字架にかからないことも、そこから降りてくることも可能な神の子が、このように悲しみをもよおし、悩んで下さいました。主イエスは、私たちのために苦しみ悶え、祈って下さったのです。

主イエスのこの日の苦しみは、歴史上人間の誰ひとりとして味わったことのない苦しみです。主イエスの苦しみは私たちひとりひとりが味わうはずの苦しみでした。それは、罪人である私たちが、絶望的な滅びを神から言い渡される苦しみです。主イエスは私たちに代わって、その苦しみをお受けになり、十字架での死へと進んで下さったのです。

聖徒の日である今日、午後の墓前礼拝で、5名の兄弟姉妹の納骨を行います。木綿の袋に入れられた骨が墓の中に納められます。私たちの肉体は、地上の旅路を終えると、小さな袋に入るほどのわずかの骨になって土にかえるのです。神が全知全能の方であられるからこそ、私たちは愛する者の骨を土に返すことができます。もし私たちに、復活の希望が無いたら、私た

ちが地上に生まれ、地上に生きることに何の意味があるのでしょうか。最後には小さな骨になって土に返るために私たちの地上の旅路があるのだとしたら、誰もが空しく感じるでしょう。

しかし私たちは、地上の旅路を終え、最後には神の前に立つのです。その時、私たちが滅びを言い渡されないよう、主イエスは十字架にかかって下さいました。主イエスは、滅びるべき私たちのためにたったひとつのことをして下さいました。主イエスは、贖いの供えものとして地上に来て下さったのです。壮絶な絶望を身に負い、身代わりの捧げものとしてご自分を与え尽くすためにおいで下さり、「みこころのままに」と祈り抜いて下さったのです。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マルコによる福音書 第15章34節）。そう叫んで、主は十字架上で私たちの身代わりになって下さいました。十字架から降りることもできるお方であるにもかかわらず、主はご自分を救うことを放棄し、私たちに代わって、神の裁きを最後まで受け続けて下さったのです。

聖徒の日に主の食卓を囲むことが許されているのは、主イエスがゲッセマネで祈り抜いて下さったからです。「取って食べよ」、「この杯から飲め」と言われ、主の食卓を囲んだ弟子たちも、主イエスが引き渡されると、一目散に逃げ去りました。どれほど神に熱心に祈ろうとしても、私たちは目を覚ましていることさえできないのです。これが、私たちが罪人であるという真実の姿です。だからこそ、主イエスはゲッセマネで祈って下さいました。

聖餐礼典の中で、「ふさわしくない者が、ただキリストの義をまとうことによってこの食卓にあずかることができる恵みを感謝しつつ、信仰と真実をもってこの食卓にあずかりましょう」という言葉を耳にします。主イエスは、十字架に留まり続け、救いの計画が完成したと勝利宣言をして死んで下さいました。神はこの方を死人の中からよみがえらせ、勝利者としてご自分のかたわらに置かれました。こうして、私たち罪人の罪を赦し、けがれを除き、神の子として下さったのです。私たちは聖餐にあずかるたびに、「すべて御子を信じる者は滅びから救いに移されている」という救いの約束を繰り返し確認して歩み始めるのです。